4 月 14 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　21：1－14

「さあ、来て、朝の食事をしなさい」

復活の主と出会い、信仰を新たにされた弟子たちは、その場に留まることなく立ち上がります。

そして、弟子たちは、自分たちの日常へと戻っていきます。ここで言う日常とは、彼らの生業である仕事へと送り出されていくだけでなく、イエスによって託された働きをすることでもありました(「イエスは重ねて言われた。『……わたしもあなたがたを遣わす。』」ヨハネによる福音書 20:21)。イエスの復活を伝える働きへと、彼らは送り出されました(「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。」イザヤ書 61:1)。

今、厳しい状況に置かれている人ばかりでなく、今は十分満足していると思っている者たちのところへも彼らは出かけていき、主の復活を伝えました。イエスの十字架と復活によって新たに生きる者とされたことを伝えました(「あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。」ペトロの手紙一 1:23)。

伝えるという働きはいつも順風満帆ではありません。いや、むしろ厳しい状況に置かれることの方が多いものです。自分では「これで大丈夫」と思いながら立ち上がるのですが、その手の業が徒労に終わることはよくあること。気合い十分で舟に乗り込んだものの、何もとれない時と同じです(「彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」ヨハネによる福音書 21:3)。

それでも、漁師は網を打ち続けます。それはそうしなければ生きていけないという面もありますが、託された働きを全うしたいという思いでもあるでしょう。イエスの十字架と復活を通して与えられた恵みが全ての人に伝わってほしいと願い、弟子たちはまた一歩を踏み出していくのです(「人々が深い御恵みを語り継いで記念とし／救いの御業を喜び歌いますように。」詩編 145:7)。

そのような弟子たちを支えたのがイエスの食卓での委託だった、と共観福音書は伝えています(マルコによる福音書 14、マタイによる福音書 26、ルカによる福音書 22)。この場面はいわゆる「最後の晩餐」として知られています。一方、ヨハネは食事のことを記してはいるのですが、物語の主眼はユダの裏切りと洗足に置かれているようにも読めます(「夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。」ヨハネによる福音書 13:2)。

では、ヨハネにおいて食卓は重要ではないのかと問われると、さにあらず。むしろ、共観福音書以上にヨハネは食卓を大切にしています。イエスに託されたそれぞれの手の働きが徒労に終わったとしても、復活のイエスは食卓を整えて待っていてくださること。神の言葉に従って大きな成果を上げたときも、イエスは食卓を整えて待っていてくださることをヨハネは記しています(「イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで、網を打ってみると……」ヨハネによる福音書 21:6)。

ヨハネでは、復活のイエスは何度も弟子たちの前に姿を現されます(「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。」ヨハネによる福音書 21:45)。イエスによって送り出された弟子たちが、決して孤独ではないことを身をもって示してくださるのです。

「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(ヨハネによる福音書 21:12)

「お疲れさま」「よくがんばったね」という労いの思いと同時に、「さあ、また次へ」「新しい未来へ」との励ましが聞こえてくるようです。ヨハネは食卓の場面で復活の出来事をサンドイッチすることで、食卓の重要性をより強調しているのではないでしょうか。食卓は単に裏切り者を探す場なのではなく、共に分かち合う場なのだ、と。

私たちの教会では、ずっと食卓を大切にしています。それは、第一主日の聖餐だけでなく、毎週の礼拝後の食事によっても表されています。どのような立場の者も共に食卓を囲み、共に食事に与る。共に恵みに感謝し、共に自らを差し出す。近況を分かち合い、互いに覚えて祈り合う。食卓は食事の場に留まらず、隣人と共に生きる場として、イエスによって豊かに整えられていることを覚えて、今日も私たちは恵みを分かち合うのです。